

# BOOK REVIEW

ヒトは森を破壊しないでほしい  $\rightarrow$  色80% + 20%

『森の鹿と暮らした男』 ~ 20a 新JM (以下同)

ジョフロワ・ドローム 著／岡本 由香子 訳

学校が肌に合わず家庭学習をしていた10代の青年ドロームが、フランス郊外のすぐそこにある森の自然に惹かれて通ううちに、自宅には帰らず森に住むようになった。その本人による森で暮らした7年間の記録が、本書である。しかも、ヒトの社会から離れて鹿と仲良くしていたという。

森で暮らすと聞くと、多くの読者は「食べ物は何?」「布団は何?」「洗濯は何?」「風呂は何?」と気になるだろう。ドローームは食糧を森で現地調達していた。布団は使わない。フランスも冬は雪が降り、夜は冷える。マッチだけはドローームも必要とした。火がなければ冬は越せない。現代の都会人は視覚に頼る生活をしているが、森で野生生活をしていると、聴覚も嗅覚も味覚も鋭くなる。というか、鋭くないと生きていけない。ドローームも野生動物として感覚を研ぎ澄まし、食べられる草や実を選り分け、森の気候に合わせて暮らしていた。そして独りぼっちではなく、鹿の友達がいいた。どの鹿も個性的で、賢く、用心深く、尊敬に満ち、愛情に溢れている。鹿たちはフランス語を身につけていないが、ドローームは鹿語の意味を理解して自らも鹿語を発した。そして互いに意思疎通ができた。何ということか。そして人生ならぬ鹿生の大きな区切りにも立ち会っている。出産や死である。ドローームは学校では習わない大切なことを、鹿から学ぶ。

日本の国土は7割が森林で、森林の5割が天然林、4割が杉や檜の人工林らしい。ドローームのような生活は、日本でも地方によってはできるかもしれない。もちろん、何年も暮らせるのは、ごく限ら

れた者だけだろう。森の地理や気候や植生や動物を知り尽くしているだけでなく、知恵が働かないと簡単に命を落としてしまう。ヒトは、自分が野生動物より賢いと勘違いしている。ほとんどのヒトは、スマホなどの文明の利器を使っている、その機器を発明して製作したわけではない。そして、食糧も水も衣服も靴も眠る場所も、自分では調達できない。しかも、ちょっと間が抜けていても体力がなくても現代社会では何とか生きていける。野生動物は、健康で、運動能力が高く、頭が良く、しかも運が良い者しか生き残れない。このどれが欠けても、餌にありつけず、敵に襲われ、病氣や暑さ寒さに打ち勝てないからである。ドロームが繰り返して述べているように、自然と野生動物から学ぶことが多いのは間違いない。

ロバート・レッドフォード主演の映画『大いなる勇者』(原題 Jeremiah Johnson)は、北米の森で狩猟生活を送る物語で、人里を離れた自然の中で何年も一人で暮らす点はドロームと似ている。しかし自分で建てた山小屋に住み、銃で熊を仕留める。ドロームは、山小屋を建てないし銃も扱わない。まさしく鹿のように暮らしていた。奈良公園の鹿は世界的に有名

で、ヒトに飼われているのではなく野生である。鹿麁餅はあくまでおやつで、主食の草は山で食べている。そして鹿のほうがヒトの生息域に入り込み、ヒトを恐れない習性を身につけている。本書とは逆である。

ドロームは本書で、鹿との暮らしを自慢しているわけではない。ヒトを含めたあらゆる生き物が森に生かしてもらっていることを、訴えている。何よりドロームが伝えたいのは、ヒトが森を傷めつけていることである。別に鹿の代弁者というわけではなく、ヒトとして、国は違えど、ドロームの思いは日本でも当てはまる。そして森だけでなく海にも河にも空にも同じことが言えるだろう。カバーには「7年間暮らした」と書いてあるので、読み進めて残りページ数が少なくなると、「なぜ森を降りたのだろう?」と、気になりだした。その答えは二つある。ぜひ本書で確かめてもらいたい。

この物語は真実なのだろうが、すべてドロームの一人称で語られるので客観的な証拠はなく、でっち上げの嘘っぽさという疑いが残らないわけではない。鹿と信頼関係を築き上げたとのことだが、ひょっとしたらドロームがそう思い込んでただけで、鹿たちはドロームを何とも思っていなかったかもしれない。巻末に添えられた研究者による解説でも、同じ懸念が記されている。いや、こんな疑いを抱いてしまうのは、書評子の思考回路が汚れたヒト社会に染まって素直でなくなっているためか。森で鹿と暮らして、真っ正直になりたい。

(以下同) { 水谷 光 (市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室) 24

シンデレラガール・イヤー  $\rightarrow$  80% + 20%

『ミーナの行進』

小川 洋子 著

37 新聞記事に、米国タイム誌が選ぶ「2024年の必読書 100 冊」の一冊に本書が選ばれたとあった。単行本が2006年の刊行なのだが、2024年に英語版(題名は“Mina's Matchbox”)が刊行され、選考リストに入ったということであろう。著名ながら、映画『博士の愛した数式』に触発され、原作の一部を本屋で立ち読みしたことぐらいしかない。早速読んでみることにした。

時は1972年。幼くして父を亡くし、母親に育てられた主人公の朋子は、家庭の事情で小学校の卒業式の翌日に母方の伯母夫婦のところに預けられる。岡山駅から一人新幹線に乗り、新神戸駅に降り立った彼女は、日本人離れの風貌を備え悠然とメルセデス・ベンツのボンネットにもたれかかった伯父に迎えられる。

それが暗示するように、それまでの朋子にはまったく縁のなかった夢の世界を舞台に物語が進んでいく。高級住宅地の芦屋に建つ、部屋が17もある大豪邸。そこはかつて小さいながらも、動物園が備えられていたほどの広大な屋敷。しかし朋子は臆することなく、伯父の家族や先代の時代から勤めているお手伝いの寺田さん、庭師の小林さんたちと挨拶を交わす。

伯父のファミリー（小説内にファミリーネームが見当たらない）は、それぞれ独特である。伯父は飲料メーカーの社長、長期間屋敷を留守にすることが多いのだが、ファミリーの誰もそれを不思議に思わない。伯母はタバコと酒が好きで、おおかた一人部屋に閉じこもり、趣味は印刷物の誤植探し。ローザおばあさんは、戦前にドイツから伯父さんの父親の

もとに嫁いできた女性。悲しい過去を胸に秘めている。大の化粧好きで、朋子にもお化粧を施すほど。小学6年生の娘ミーナはひどい喘息に悩まされ、自由に外出できず、それもあるって大変な読書好き。長男の龍一は、いわくありげな大学生で目下スイスに留学中。一度帰国するが、まるで石原 慎太郎の小説「太陽の季節」さながらの「太陽族」のような生活を送る。寺田さんは規律を頑なに重んじる。料理番だが、食材はだいたい御用聞きが運んでくれる。小林さんは庭師だが、そのほかの雑用もこなす。

かつてローザおばあさんの結婚 40 年を記念して開かれたホテルでの晚餐会が当時のコックと同道のボーイによって再現され、食後は優雅な「音楽会」が催される。それに象徴されるような、俗世間とは無縁の空間。リアルさや生活臭さがまったく感じられない。突然飛び込んできた朋子にも、ドラマでおなじみの陰湿ないじめや虐待はなく、ファミリーの全員が優しく親身になって世話をしてくれる。

人の内面に鋭く迫る心理描写もない。泥棒騒ぎはあるが、特に劇的な事件が起きるわけでもない。では、そんなおとぎ

話のような本小説の魅力はいったいどこにあり、なぜ必読の書に選ばれたのか。

一つ目は書き割りの妙にある。乗り物が実に効いている。乳母車や自転車は朋子が自由に空想の世界にはばたく小道具。秀逸は屋敷内の池に生息する“コヒトカバ”のボチ子。まったくとした感じがなんとも愛らしいが、ミーナが安全に小学校に通学するための行進用の乗り物なのだ。

最も重要なのは英訳題名にもなっている、ミーナが愛するマッチ箱であらう。初めて朋子がマッチの魔術師でもあるミーナに会ったときも、マッチ箱の中でマッチ棒がこすれる音がする。印象的なのはミーナが健康器具の「光線浴室」の中で、朋子を相手にマッチ箱に描かれた面をモチーフにした創作である。それが二つ目のたまらない魅力である。ミーナが手に入れる複数のマッチ箱には、それぞれ意味深長の画が描かれている。ミーナはそれをじっくりと眺め、独自の魅惑的な物語を紡ぎ出す。それは詩的メルヘンであり、その表現力、空想力、構想力は燦然たる輝きを放つ。読者はこの「枠組造」的な創作工房に引き込まれずにはいられない。

9 平明な文章が続く。油っこさがない。終末に向けて話が盛り上がっていくわけではない。これが著者の文章術か。だから少なくとも本書は、このきらぼしのごとく輝くいくつもの創作メルヘンを読むだけでも、法外の喜びを得ることができる。

一年後、朋子は岡山に戻り、母親との生活が再び始まる。シンデレラガール・ブレイク・イーヤーはおしまい。その後伯父の屋敷は人手に渡り、ファミリーの新しい歴史が始まる。大人になった朋子とミーナはともに自立し、充実した毎日を送る。

もう一つ。随所に織り込まれた寺田順三の筆になるカラーの挿画が光彩を放つ。これもファンタスティックである。

関本 英太郎



BOOK  
REVIEW

読書

北京で蝶が羽ばたけば  
ニューヨークで嵐が起きる

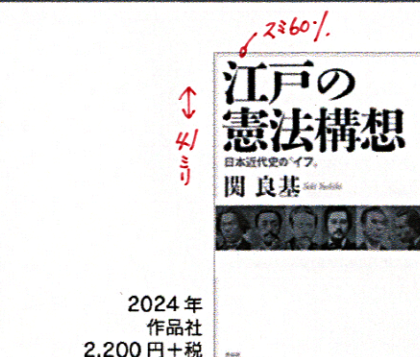
『江戸の憲法構想 日本近代史の“イフ”』

関良基 著

書評子が小学生の頃には「江戸時代は士農工商の身分制度に縛られ、民衆は武士に虐げられ悲惨な生活を送っていた。しかし明治維新により四民は平等となって日本は近代化され、富国強兵策が奏功して短期間で列強に並ぶことができた」というように教えられていた。しかし素直な子どもではなかった書評子は、攘夷を主張していた連中がなぜ開国したのか謎だったし（君子は豹変するからか？）、またすでに欧州では過去の遺物となりつつあった王政への復古を目指す明治薩長政権が近代的だとは、とても思えなかった。

歴史の進化の方向はあらかじめ決められていて（誰によって？ 神にか？）、諸国の政治経済社会などの違いはその発展のいずれの段階であるかの違いである、という考え方が過去にはあった。今でもそう信じている人はいるかもしれない。しかし生物の進化に必然性がないのと同様に、歴史にも必然性などない。歴史の定行進化説は、勝ったものは優れたもの（進歩的）であり、負けたものは劣ったもの（反動的）という根拠のないドグマでしかないのだが、このドグマは「テンノウヘイカバンザイ」派にとっても、「マルクス・レーニンバンザイ」派にとっても、自分の主張を正当化するのに都合がよいので長く続いているのだともいえる。しかし結果を前提として過程を議論するのは、論理的ではない。

見出しは気象学者のローレンツによるもので、誇張された寓意表現ではあるが、（気象のように）複雑なシステム系では部分的なごくわずかな違いが最終的には結果を大きく変えるとの意味である。つまり、長期的な予想はたいてい外れるの



である。人々の未来も、あらかじめ決められたものであるわけがなく、人々の自由意志に基づく（≒無秩序な）数々の行動や偶然が、その後の流れを大きく変えてゆくものだととらえるほうがよい。

本書の著者は拓殖大学政経学部の教授であり、もともとは農学の研究者で、資源の持続可能性や再生といったテーマから歴史にも関心をもつようになったと思われるが、これまでに松平 忠固（1812～1859）、赤松 小三郎（1831～1867）という二人の銘々伝を上梓している。恥ずかしながら書評子はどちらも知らなかったのだが、前者は老中として開国を進め、かつ生糸の輸出で経済的に成功した上田藩の藩主であり、後者はその家臣であって、明治になる前の段階で普通選挙・議会政治や人民平等の原則を建白している兵法家・政治思想家である。なお巷間では、そうした先進的提言の例として坂本 龍馬の「船中八策」が名高いが、実のところ、それを裏付ける史料はない。ともに勝 海舟に学んでいる（赤松が先輩）ので、同じことを考えていた可能性はあるが、坂本でまとまった文書になったものは見つからない。

著者あとがきによると、上記二人に代表されるような、既存の明治史観にとっ

て不都合な人物を消し去ってしまう間違い（本書では数名の歴史学者、政治学者と小説家の実名があげられ、一部はその思想形成史に踏み込んでいる）の根源を探ろうと考え、その最初の一歩として、江戸時代末期に出現した憲法構想に注目して、日本の近代化には可能性がいくとおりもあり得たこと、明治維新が唯一の、あるいは最善の、近代化策とはいえないこと、を論じたのが本書である。副題にある「日本近代史の“イフ”」はそれを意味している。

本書によれば、徳川政権時代に幕府や土佐藩などで、積極的に議会政治が論じられ草案が試みられている。土佐の山内 容堂が徳川 慶喜に大政奉還を建言し、慶喜がそれを受けて「政権を朝廷に帰し奉り、広く天下の公議を尽くし〔1867（慶応3）年10月14日付徳川慶喜奏聞の一部〕」と上奏した段階ですでに、議院制の気運が小さいものではなかったのは明らかだろう。幕臣である加藤 弘之は1868年に「立憲政体略」という本を出版し、国憲に書き込まれるべき項目として「生活の権利」「結社及び会合の権利」「思・言・書、自在の権利」などを記載しているとのことだ。これだと「大日本帝国憲法」よりも、「日本国憲法」に近いのではないだろうか。その「大日本帝国憲法」が公布されたのは1889（明治22）年のことであり、日本国憲法が公布されたのは1946（昭和21）年である。そこまで要した時間と犠牲を考えると、明治維新は日本の近代化において絶対に必要であったとは言い切れない気になってくる。

福家 伸夫  
（帝京大学ちば総合医療センター）